

文化

「招待作家展」美術表現の現在

黒澤は誰だ!

洲鎌 朝夫

拒否しながらも、程よい「間」が緊張のなかに友情ともとれる諧調を奏している。「描く」は「機する」ともみた。

黒澤明が逝った。黒澤作品を男性路線と観る向きもあるが、これがなかなか女性がつまみ描けている。「蜘蛛の巣城」の山田五十鈴、「羅生門」の

サムライはそろった 群れない個性の出会い

久方ぶりにエキサイティングな展覧だ。イヤこれはハジメテといっている。

実は「琉球弧・美の渦流展」が彫刻だけでなく、平面をリンクさせたのは去年からなのだが、永山信春他があらたに絡んで塩梅よく活気づいている。

所詮、美術は「個」の所産に他ならないのだが、その激しい個のぶつかり合いが相乗効果を醸し出したら「美術する」ことから美術の外の世界へと誘いはじめめる。

人には二種類ある。群れたがり屋とそうでない者だ。ここに招待されたのは群れたがらないサムライ達だが、今、旺盛な個展活動とはひと味ちがった協奏曲が流れている。

群れない個性の一堂での出会いはまさに絶景といっている。

威風あたりを払うサムライ達の作品は、付合するモノをきびしく

京マチ子などちよいと踏みこむと、星の如き女優陣が美に上手に演出されている。「椿三十郎」の入江たか子にいたっては三船も仲間も喰われっ放しである。

ちよいと横道にそれだが、この「招待作家展」黒澤映画に交換してみて、これがなかなか興味津々たるものとなる。「用心棒」あり、「デルスウザー」あり、「ま

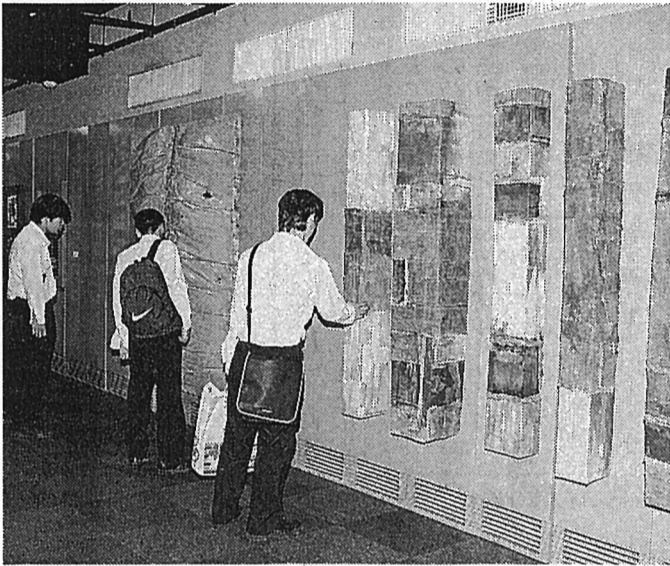
あたたよ」ありなのだ。

作家諸賢には乱暴な戯言と叱責を覚悟でエクステンションしてみる

「七人の侍」とみてとって、大浜用光を村の長老に据えて、永山志村、真喜志三船、清水宮口、南部千秋、高良加東、新垣稲葉、宮城木村とキャストインクしてみた。これからは肝心だが、永津島崎、小津島と絡んでクラクションとなる。

ところでキャストインクは決まったが黒澤は誰だ。そう、それはあなたなのだ。あなたがクロサワ・カントクなのです。

ロケハンもあなた次第、サウンドトラックの効果音も貴公次第。美術を七面倒くさいとみてとってはどうまでいってもつまらない。鈍重なモノクロームの世界にパリとまばゆいばかりの極彩色が散る。



招待作家展—リウボウホール

威風あたりを払うモノあらば、暴れに暴れ回るモノ、強さをやさしさでみせるモノ、鋭利な刃物の切れ味をつぎつけるモノあらば、ふわりとヒューマンな風を流しこむモノ。繊細さのなかに女の業のきびしさをほらむモノあらば、色香のなかに男の小さを包みこんでみせるモノあり。

作家が手習いであるなら、こちらには眼習いでいくのだ。映画は金がかかると有難いことに美術を眼習いに金はいらない。これら群れたがらない個性の響宴、楽しみです。

「琉球弧・美の渦流展」招待作家展のほかにパレットくもじの内、遠くは上野・ドイツ村に力作が躊躇している。これら精神のたまり場に眼光炯々たる感動が待ちうけている。

「匠設計代表」

◇「招待作家展」は、リウボウホールで4日(水)まで開催中。